「第三回学習基本調査」分析レポート

1. 子どもたちの「なりたい職業」
2. 親とよく話をしている子の特徴

ベネッセ教育総研

●これまでに発表した 学習基本調査」の主な知見

①経年での比較の結果（1990年調査、1996年調査、2001年調査の比較）

●学校外の学習時間が減っている
家での学習時間について「ほとんどしない」＋「およそ30分」と回答した割合が、小学生と高校生で４割、中学生で３割に。

●テレビを見る時間が増えている
中学生では「３時間30分以上」テレビを見るという層が急増し、17.5％（1990年）→30.9％(2001年）に。

●学校の授業がわかるようになっている
小学生、中学生、高校生ともに、ほとんどの教科で「わかっている」の割合が増えている。総じて、授業の理解度は上がっている。

●高学歴志向が弱まっている
「４年制大学まで＋大学院まで」を希望する割合は横ばい、「短期大学まで」は減少し、「専門学校・各種学校まで」が増加している。

●学習に関する悩みが増えている
親や先生からのプレッシャーは弱まったものの、勉強を負担に感じ、今の勉強が何に役立つのか意味を見出せない中学生が増えている。

> 受験競争が緩和し、保護者や教師からのプレッシャーも減少しているためか、学習動機としての「受験」の影響力が弱まっている。その結果が、子どもの意識面での変化（たとえば、「なぜ勉強するのか」という目的が見出せない悩みの増加など）や、行動面での変化（学習時間の減少など）に表れている。
> 今後は、「受験」という一律の動機づけに依拠するのではなく、「受験」以後の長い将来・進路を考えて「勉強の意味」を見出せるような“進路・目標構築力”を育てる支援が必要である。

②学力階層別の分析結果

●高校生は学力階層によって学習時間が大きく異なる
学習時間と学力階層の関係についてみたところ、小学生と高校生では両者に強い相関があった。

●学力上位層は自らを「考える」タイプだと答える生徒が多い
「難しい問題をじっくり考える」「できるだけ考えようとする」など、考えるタイプは中学生、高校生ともに上位に多い傾向がある。

●教科に関する関心や意欲が高いほうが学力も高い
小学生、中学生、高校生ともに、教科にかかわる驚きや感動体験、関心や意欲をもっているほうが、その教科の学力が高い。

●学習の悩みは学力下位層ほど多い
上手な勉強がわからない悩み、学習の負担感、今まで努力しなかったことの後悔など、ほとんどの項目で学力下位層の割合が高い。

●学力上位層ほど保護者とよく話をしている
学力上位層ほど、保護者とよく話をする傾向がある。また、上位の子どもの保護者は成績を把握したり、勉強をみてあげたりしている。

> 学力が高い子どもの保護者は、子どもとよく話しをし、勉強を教えたり、成績に関心をもっている割合が高い。こうした保護者とのコミュニケーションが密な子どもは、教科に関する関心や意欲も高く、学習態度もまじめな傾向がある。保護者が子どもの学習に関心をもってかかわることで、子どもに学習の意味や方法を伝え、まじめな態度を育てているものと推察される。
> 学習方法を工夫し、目標を達成するような“学習力”をもった子どもに育てるためには、子どもへの直接の学習支援とともに、家庭教育のあり方を見直す機会を保護者に提供するような支援も必要である。

⇒詳しいデータは、以下の Web ページに紹介されていますので、ご参照ください。　http://www.crn.or.jp/LIBRARY/GAKUSHU/

１．子どもたちの「なりたい職業」ベスト20

男子

小　学　生　　1,238名		中　学　生　　1,307名	
①野球選手	15.7%	①サラリーマン	4.6%
②サッカー選手	8.5%	②野球選手	4.4%
③お店屋さん(花屋･パン屋などの小売店)	4.1%	③学校の先生	3.2%
③調理師・料理店	4.1%	④ゲームクリエーター･ゲームデザイナー	2.4%
⑤医者・歯医者	3.7%	⑤警察官	2.4%
⑥サラリーマン	3.6%	⑥公務員	2.2%
⑦ゲームクリエーター･ゲームデザイナー	3.5%	⑥コンピュータプログラマー・ＳＥ	2.2%
⑧大工	3.2%	⑥自動車整備士	2.2%
⑨研究者・科学者	2.9%	⑨サッカー選手	2.1%
⑩芸能人（タレント･歌手･声優など）	2.2%	⑩お店屋さん(花屋･パン屋などの小売店)	2.0%
⑪警察官	2.0%	⑩医者・歯医者	2.0%
⑫マンガ家・イラストレーター	1.4%	⑫調理師・料理店	1.7%
⑬学校の先生	1.1%	⑬大工	1.5%
⑭電車の運転士・駅員	1.1%	⑭芸能人（タレント･歌手･声優など）	1.2%
⑭習い事(習字･ピアノ･バレエなど)の先生	1.1%	⑮建築家・設計士	1.0%
⑯パイロット	0.8%	⑮研究者・科学者	1.0%
⑰トラック運転手	0.7%	⑰エンジニア・技術者	0.8%
⑱弁護士・検事	0.6%	⑱消防士	0.8%
⑲コンピュータプログラマー・ＳＥ	0.6%	⑲マンガ家・イラストレーター	0.7%
⑲会社の社長	0.6%	⑲農業	0.7%
特になし、未定、無回答	19.1%	特になし、未定、無回答	34.2%

「あなたが将来就きたい職業は何ですか」を自由記述形式で聞いたところ、男子の第１位は、小学生「野球選手」、中学生「サラリーマン」という結果になった。

小学生・男子は、「野球選手」に次いで「サッカー選手」が人気で、四人に一人（23.2%）がいずれかになりたいと答えている。しかし、「野球選手」「サッカー選手」を希望する子どもは、中学生では6.5%と減少する。調査を昨年に実施したため、「サッカー選手」は小学生8.5%、中学生2.1%にとどまったが、今年調査を行えば、W杯のサッカー人気を反映して数値が上がるものと推察される。また、女子の数値には及ばないものの、「お店屋さん」も上位に入る。

中学生になると増えるのが、「サラリーマン」「学校の先生」である。中学生・男子は、身近にいる大人（父親や先生）をモデルにして、職業観を形成していることをうかがわせる。「サラリーマン」という回答のなかには、具体的な会社名を記述したり「食品会社の社員」などと回答したりする子もいて、前向きに「サラリーマン」を選択している子も多い。ただし、第１位であるが4.6%にとどまっていて、集中する回答がないことが中学生・男子の特徴である。また、「なりたい職業」が「特にない」「未定」と答えたり無記入だったりする割合が高く、三人に一人にのぼる。

小・中学生の両方を概観すると、「ゲームクリエーター・ゲームデザイナー」「コンピュータプログラマー・ＳＥ」といった時代を表す職業が上位に入っている。この二つは、男子に多く、女子にはほとんどみられない。

女子

小　学　生　1,154名

①お店屋さん(花屋･パン屋などの小売店)	16.4%
②保母（保育士）･幼稚園の先生	7.3%
③美容師・ヘアメイクアーティスト	6.3%
④芸能人（タレント･歌手･声優など）	5.8%
⑤マンガ家・イラストレーター	5.5%
⑥看護婦	4.2%
⑦学校の先生	3.8%
⑦ファッションデザイナー	3.8%
⑨医者・歯医者	3.5%
⑩習い事(習字･ピアノ･バレエなど)の先生	3.2%
⑪調理師・料理店	1.9%
⑫獣医	1.8%
⑬スチュワーデス	1.0%
⑬アナウンサー・キャスター	1.0%
⑮ＯＬ（サラリーマン）	0.9%
⑯警察官	0.8%
⑯ピアニスト	0.8%
⑱弁護士・検事	0.7%
⑲画家	0.6%
⑳トリマー	0.5%
⑳薬剤師	0.5%
⑳動物園の職員・飼育係	0.5%
⑳犬の訓練士・調教師	0.5%
⑳水泳選手	0.5%
特になし、未定、無回答	12.0%

中　学　生　1,184名

①保母（保育士）･幼稚園の先生	10.3%
②美容師・ヘアメイクアーティスト	7.3%
③芸能人（タレント･歌手･声優など）	3.5%
④マンガ家・イラストレーター	3.3%
⑤ファッションデザイナー	3.2%
⑥学校の先生	3.0%
⑥お店屋さん（花屋・パン屋などの小売店）	3.0%
⑧看護婦	2.6%
⑨福祉士・ヘルパー（福祉関係職）	2.4%
⑩トリマー	1.8%
⑪薬剤師	1.6%
⑫医者・歯医者	1.3%
⑫獣医	1.3%
⑭公務員	1.2%
⑮通訳・翻訳家	1.0%
⑯警察官	0.8%
⑰弁護士・検事	0.8%
⑱ＯＬ（サラリーマン）	0.7%
⑱スチュワーデス	0.7%
⑱小説家	0.7%
特になし、未定、無回答	26.6%

女子の第１位は、小学生「お店屋さん」、中学生「保育士･幼稚園の先生」という結果になった。

小学生・女子は、「お店屋さん」が圧倒的な人気であるが、そのなかでも「花屋」（50名）、「ケーキ屋」（48名）という回答が多かった。

小学生と中学生の回答は似ており、「保育士・幼稚園の先生」「学校の先生」などの教育職、「芸能人」「マンガ家・イラストレーター」 などの華やかな職業、「美容師・ヘアメイクアーティスト」「ファッションデザイナー」などのファッション関係の職業が上位を占める。男子に多かったスポーツ選手は、ほとんど見られない。

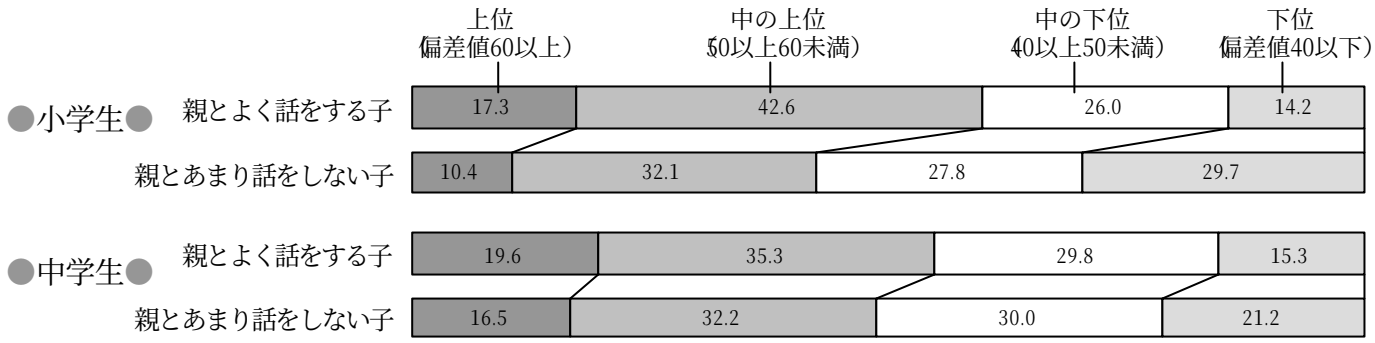
中学生になると、福祉関係職やトリマーなどの時代を表す職業がベスト10に入る。しかし、「特になし」「未定」や無回答が増えるのは男子と同様で、およそ四人に一人が「なりたい職業」を明記していない。

また、「就きたい職業」という聞き方をしたためか、「主婦」や「お嫁さん」といった回答はほとんどみられなかった（小0.4%、中0.3%）。

男女を問わず「政治家」になりたいという希望（【】内はそのうち「総理大臣」と回答した児童･生徒）は、小学生3名【1名】、中学生3名【1名】で、全体（4905名）の0.1%に過ぎず、メディアに登場する機会が多い職業であるのに反して、子どもたちのモデルにはなっていない様子がうかがえる。

2．親とよく話をしている子の特徴

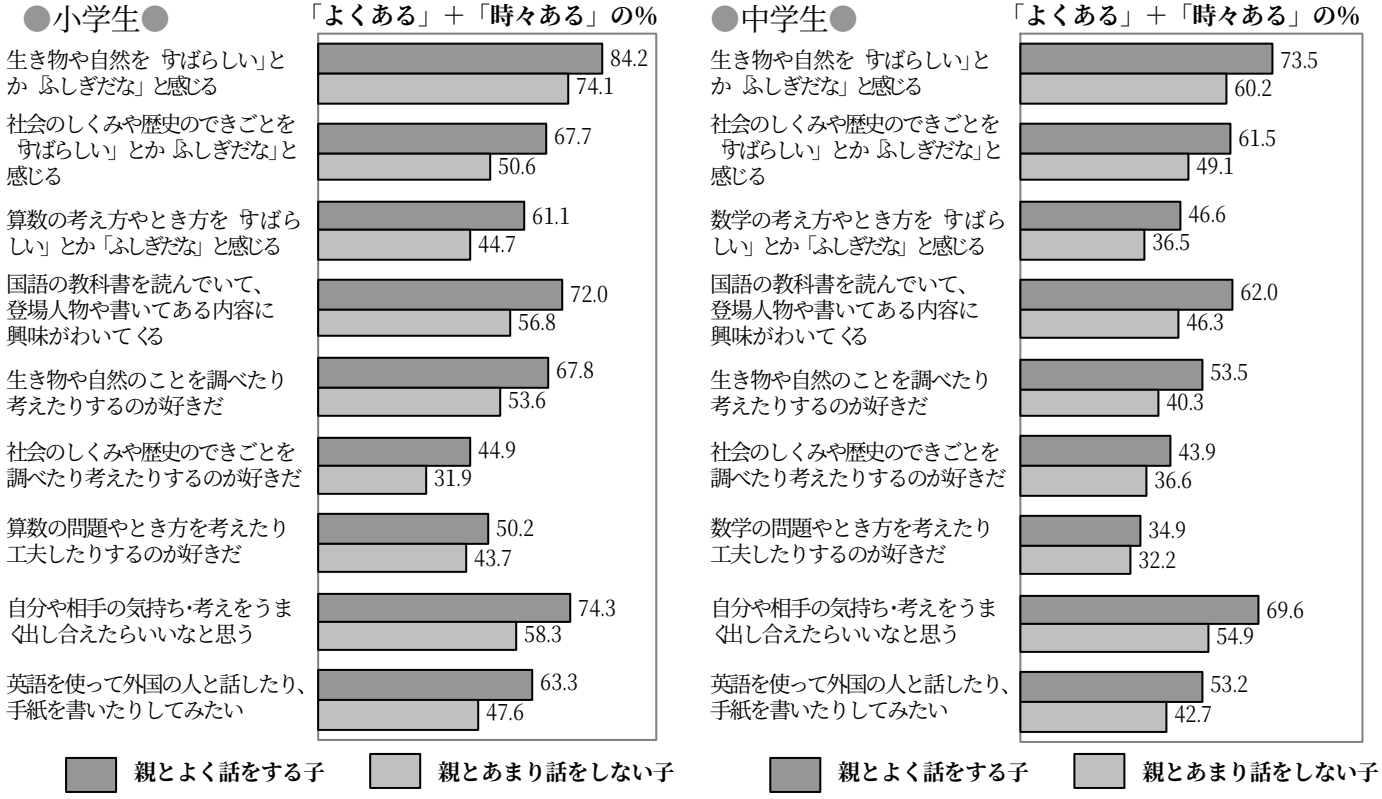
① 親とよく話をしている子は、学力が高い



※学力は、小・中学生については「アンケート調査」と同時に行った「学習到達度に関する調査」の結果による。両調査に協力した児童・生徒は、小学生1,357名、中学生1,021名。

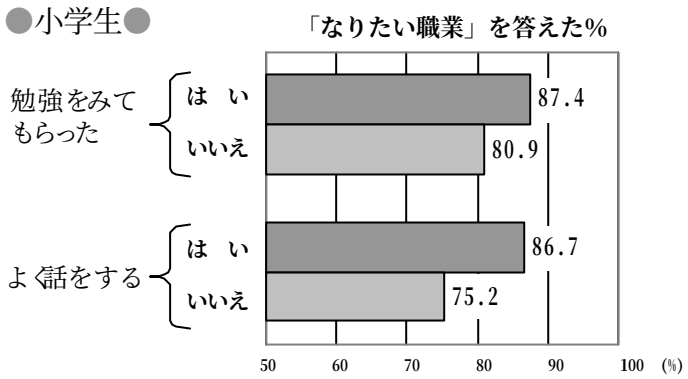
保護者と「よく話をする」と回答した子どもは、そうでない子どもよりも学力が高い傾向がある。真ん中よりも上（偏差値50以上）の比率は、小学生の場合、「よく話をする子」が59.9%なのに対して「あまり話をしない子」は42.5%である。また、中学生では、「よく話をする子」が54.9%に対して「あまり話をしない子」は48.7%である。

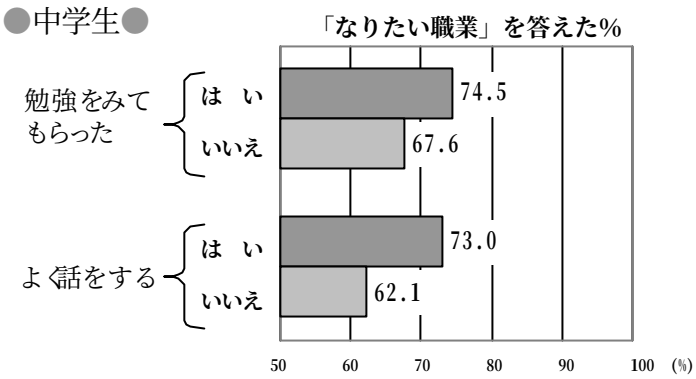
② 親とよく話をしている子は、学習内容に対する関心・意欲が高い



では、どうして親と話をすると、学力が高まるのだろうか。
まず、「親とよく話をする」と回答した子どもは、教科の学習内容に対する関心や意欲が高いことがあげられる。理科、社会、算数・数学、国語のそれぞれの教科について、その教科を通して不思議さやすばらしさを感じるかどうか、学習の内容を考えることや調べることが好きだったり意欲があったりするかどうかについて聞いたところ、「よく話をする」子のほうが、そうでない子よりも「ある」（「よくある」＋「時々ある」と回答する割合が高かった。
子どもは、保護者との会話のなかで、学習にかかわるさまざまな情報や価値観などを受け継いでいる。そのことが、興味・関心の広がりや意欲の高まりに結びついているものと考えられる。

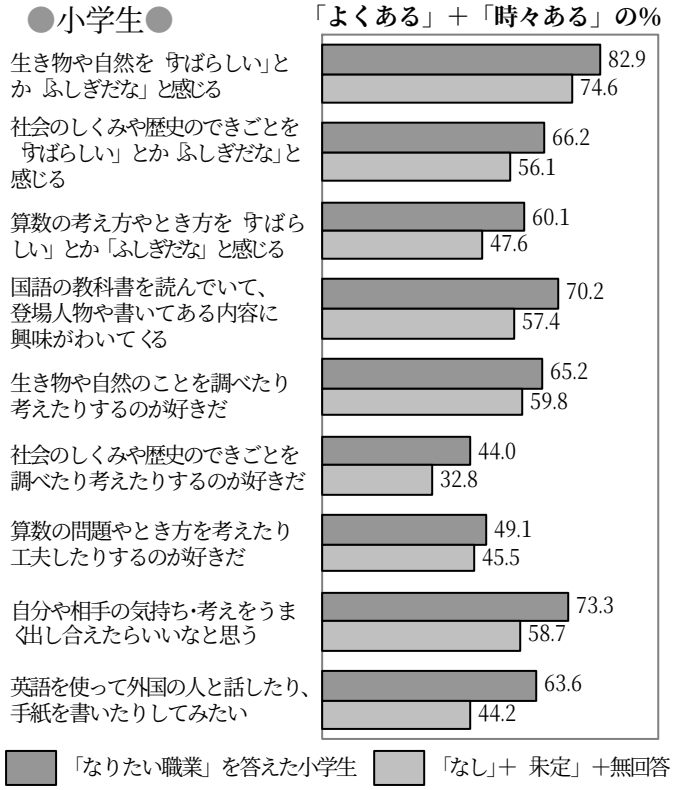
③ 親とよく話をしている子は、「なりたい職業」をもっている割合が高い

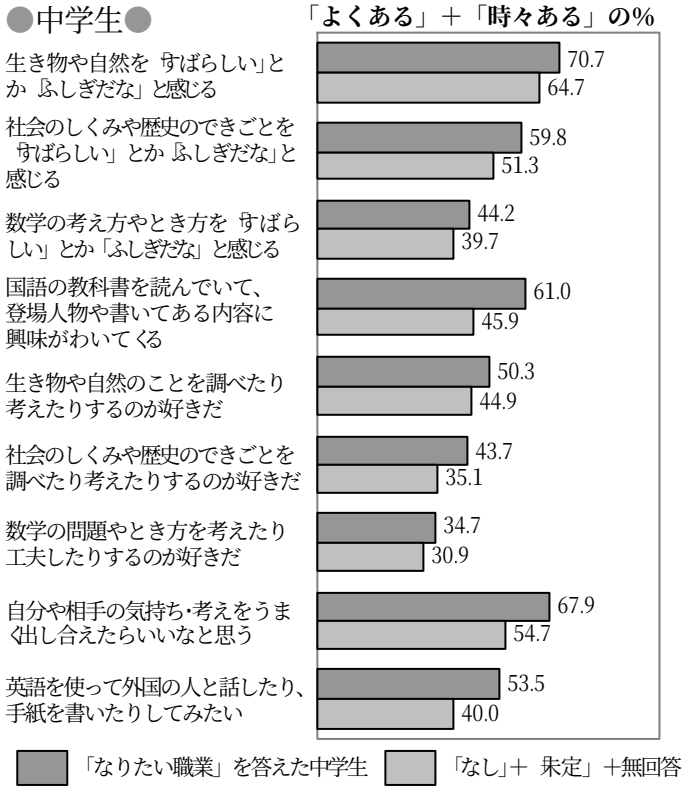




また、保護者と「よく話をする」子や「勉強をみてもらっている」などのかかわりをもつ子は、「なりたい職業」をもっている割合も高い。保護者が子どもの学習にかかわったり、話をしたりするなかで、職業に関連する情報を伝えていて、そのことが将来についてのイメージ形成に影響を与えているものと考えられる。

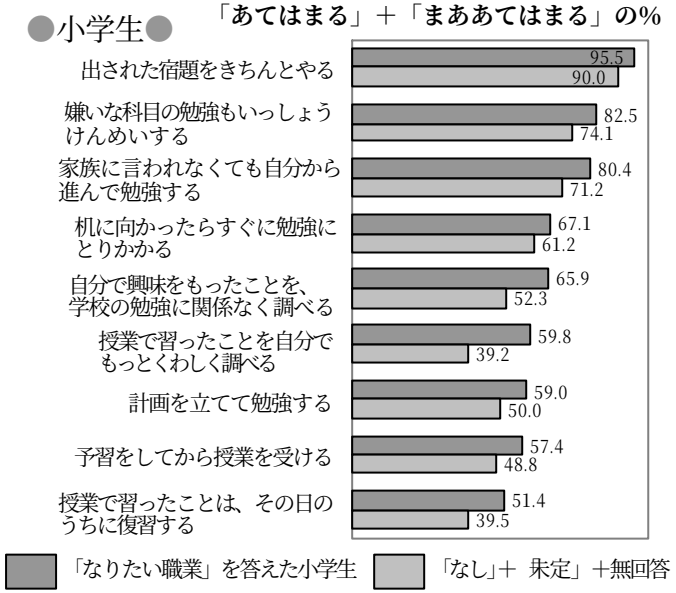
④「なりたい職業」をもっている子は、学習内容に対する関心・意欲が高い

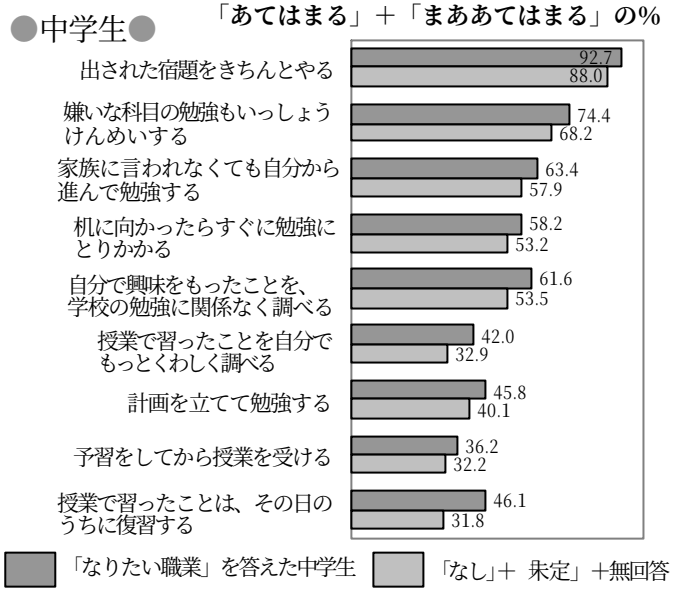




「なりたい職業」をもっている子は、教科の学習内容に対する関心や意欲も高い。「なりたい職業」のような進路目標に関する意識が、興味・関心を高めたり、学習の動機づけとなって意欲が高まっていると考えられる。
子どもといっしょに将来の進路について考え、話し合ってみるようなかかわりをもつことが、保護者や教師のような子どもをとりまく大人にとって大切であるといえる。たとえば、将来何になりたいか、それはどうしてか、そのために何をすればいいかを語り合ってみたり、10年後の姿をいっしょに想像してみたりするなどといったことをしてみてはどうだろうか。

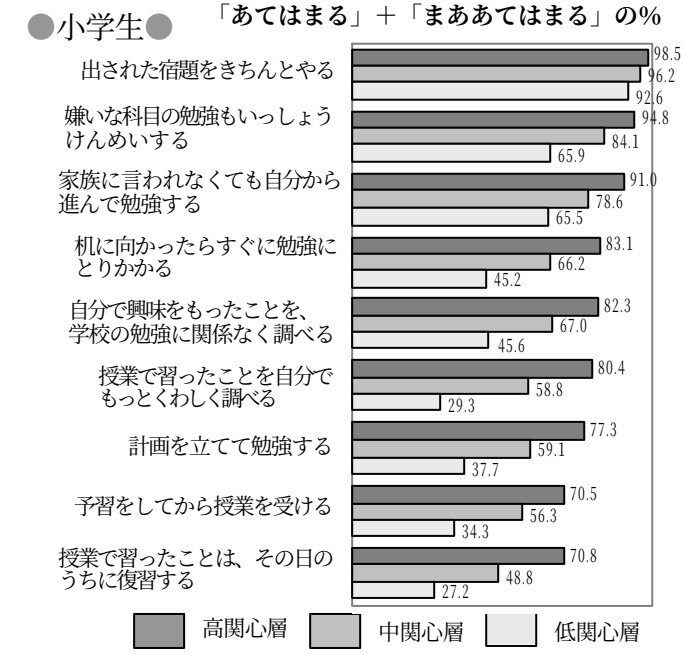
⑤「なりたい職業」をもっている子は、家での学習態度がまじめである

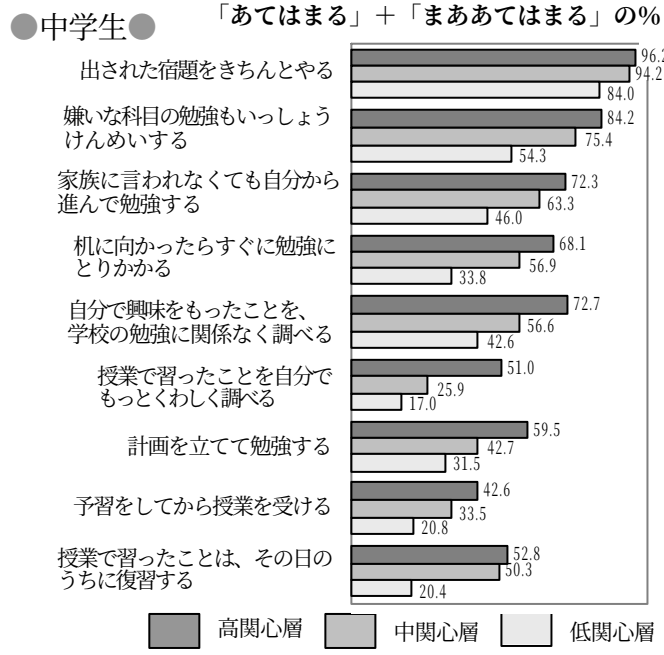




「なりたい職業」をもっている子は、家庭での学習態度もまじめである。「なりたい職業」をもっていない子よりも、自ら進んで学習し、自分で興味をもったことを学校の勉強に関係なく調べたり、授業で習ったことを自分でもっとくわしく調べたりする割合が高い。「なりたい職業」をもっている子は、自分で学習するスタイルが身についていて、より積極的な学習態度を示している。

⑥ 学習内容に対する関心・意欲の高い子は、家庭での学習態度がまじめである

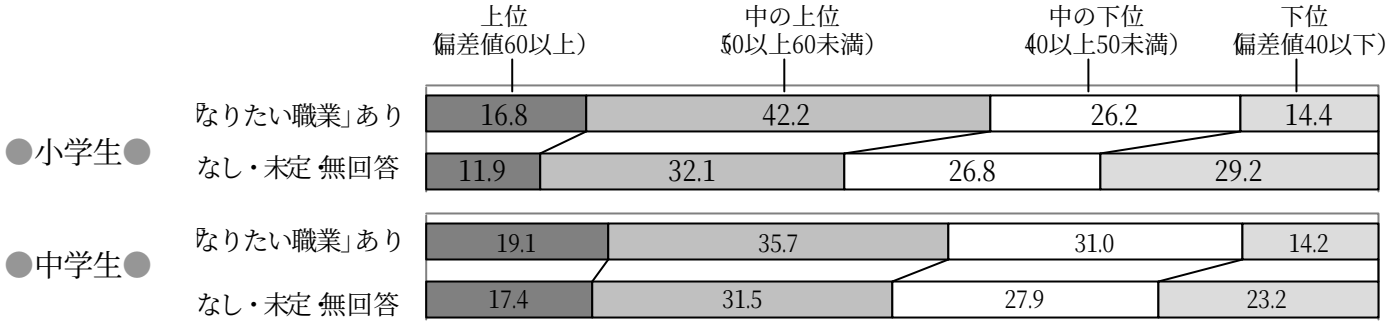




同様に、学習内容に対する関心・意欲が高い子も、家庭での学習態度がまじめである。このことは、「なりたい職業」をもっている子が、学習内容に対する関心や意欲が高いことと関連していると考えられる。そうした前向きな意識が、学習態度に影響を与えているようである。

＊「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」など、理科、社会、算数・数学、国語のそれぞれの教科について、その教科を通して不思議さやすばらしさを感じるかどうか、学習の内容を考えることや調べることが好きだったり意欲があったりするかどうかについて聞いた９項目（それぞれ「よくある」から「ぜんぜんない」までの４段階）を合計し、得点の高い上位三分の一を「高関心層」、中位三分の一を「中関心層」、下位三分の一を「低関心層」とした。

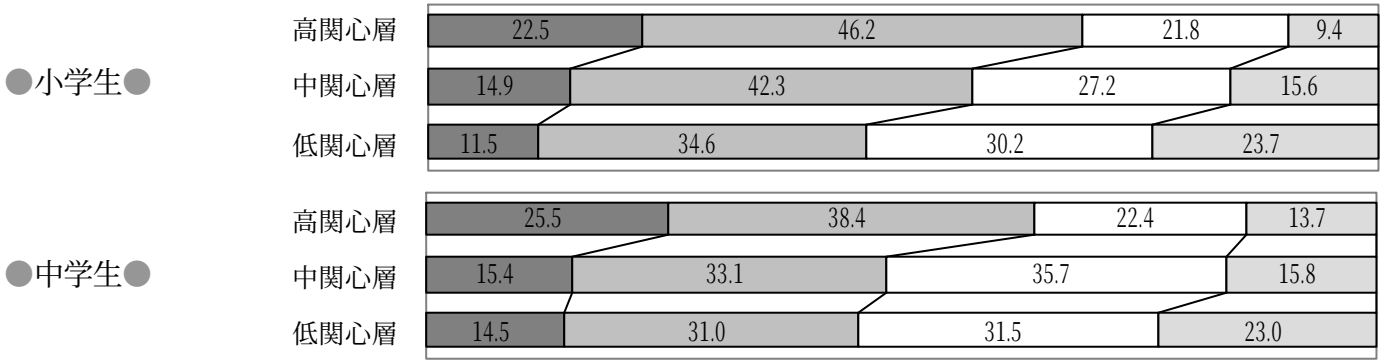
⑦「なりたい職業」をもっている子は、学力が高い



※学力は、小・中学生については「アンケート調査」と同時に行った「学習到達度に関する調査」の結果による。両調査に協力した児童・生徒は、小学生1,357名、中学生1,021名。以下、同様。

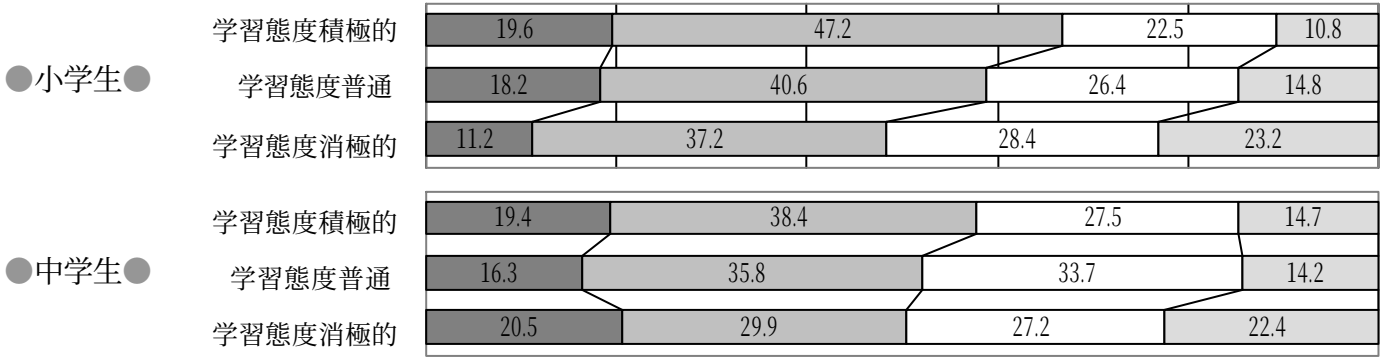
では、学力については堂であろうか。「なりたい職業」をもっている子は、もっていない子に比べて相対的に学力が高い傾向がある。これまで、職業に関する意識が学習内容に対する関心や意欲、学習態度と関連していることを示したが、そうした学習への積極性の結果として、最終的に学力が向上するものと考えられる。

⑧ 学習内容に対する関心・意欲が高い子は、学力が高い



学習内容に対する関心・意欲も、学力と相関がある。左の図に示したとおり、関心・意欲が高い子どもほど、学力が高い傾向がある。

⑨ 家庭での学習態度がまじめな子は、学力が高い

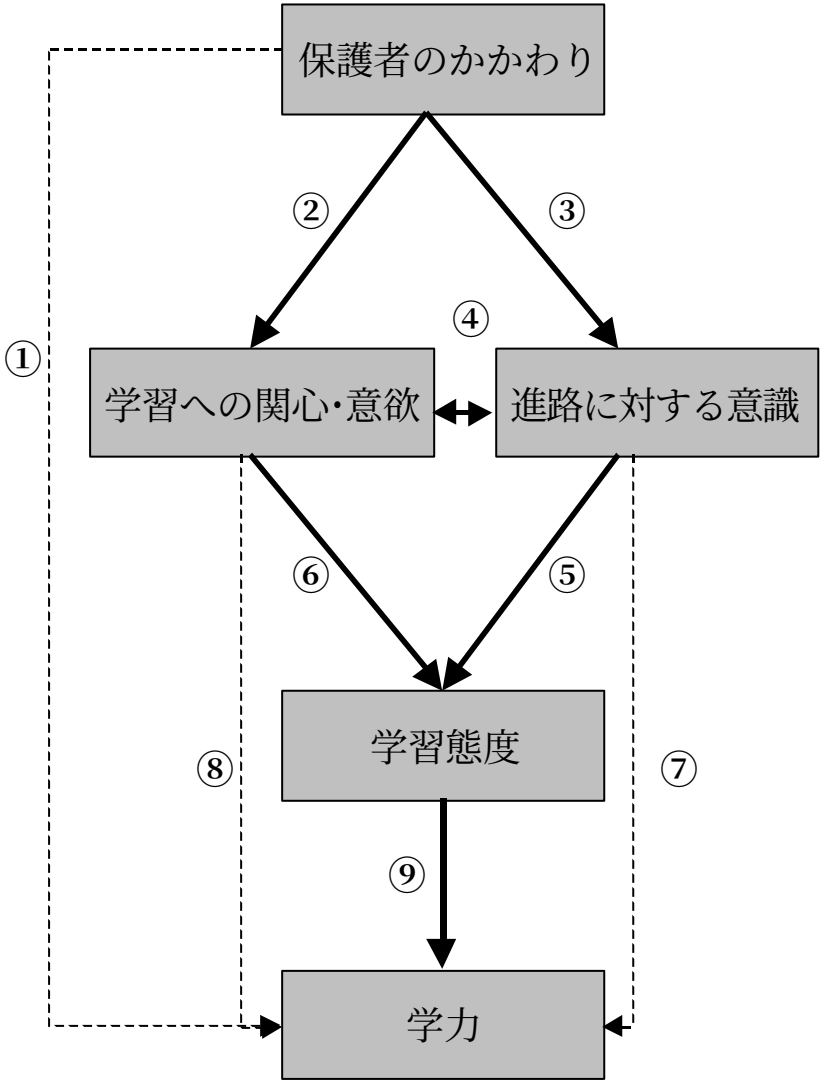


＊「出された宿題はきちんとやっていく」など、積極的な家庭学習をしているかどうかについて聞いた９項目（それぞれ「あてはまる」「まああてはまる」「あてはまらない」の３段階）を合計し、得点の高い上位三分の一を「学習態度積極的」、中位三分の一を「学習態度普通」、下位三分の一を「学習態度消極的」とした。

最後に、学習態度と学力についてであるが、両者の関連は、小学生でとくに顕著である。中学生は相関がやや弱まるが、これは自分の興味・関心に沿って学習するといった積極性に加えて、学習の仕方を工夫するといった効率性などが学力に影響を与えるようになるためと考えられる。しかし、概ね、積極的な学習態度をとる子どもほど、学力が高い傾向があるといえる。

●まとめ

●子どもの学習に与える保護者の影響のモデル●



① 親とよく話をしている子は、学力が高い

② 親とよく話をしている子は、学習内容に対する関心・意欲が高い

③ 親とよく話をしている子は、「なりたい職業」をもっている割合が高い

④ 「なりたい職業」をもっている子は、学習内容に対する関心・意欲が高い

⑤ 「なりたい職業」をもっている子は、家での学習態度がまじめである

⑥ 学習内容に対する関心・意欲の高い子は、家庭での学習態度がまじめである

⑦ 「なりたい職業」をもっている子は、学力が高い

⑧ 学習内容に対する関心・意欲の高い子は、学力が高い

⑨ 家庭での学習態度がまじめな子は、学力が高い

親とよく話をしている子は、学力が高い !?

今回のレポートでは、保護者の子どもへのかかわりと子どもの学力の関係について検討した。その結果、保護者とよく話をしている子どもほど、学力が高い傾向があることがわかった。これは、日ごろのコミュニケーションのなかに、意欲を高め、学習のスキルを身につけるカギがあるということをうかがわせる。

たとえば、「両親とよく話をする」「保護者が勉強をみてあげる」など、保護者がよくかかわっている子どものほうが、「なりたい職業」をもっている割合が高い。会話や勉強をみてあげるといった保護者のかかわりに、職業に関連する情報が含まれていて、進路に対する意識の形成に影響を与えているようである。

さらに、そうしたコミュニケーションは、子どもの学習への関心･意欲も高めている。意識、無意識を問わず、学んだことが生活で役立つ場面を示したり、子どもと一緒に試行錯誤して考えたりといったことが、子どもに学習の意味や方法などを伝えているものと考えられる。

また、このことに加えて、進路に対する意識が学習動機を明確にし、学習への関心･意欲を高めるといったメカニズムがある。「なりたい職業」をもっている子は、教科の学習を通して不思議さやすばらしさを感じたり、教科の内容を考えたり調べたりするのが好きだという割合が高い。

このような進路に対する意識や学習への関心･意欲は、学習態度に影響を与えている。「なりたい職業」をもっている子や関心・意欲の高い子のほうが、家庭でまじめに学習する傾向がある。

学力を高めるためには、子どもへの直接的な学習支援だけではなく、保護者への支援も必要！

これまで述べてきたように、保護者のかかわり、学習への関心･意欲、進路に対する意識、家庭での学習態度は、いずれも相関が強い。保護者のかかわりが進路に対する意識や学習への関心･意欲を高め、そのことがまじめな学習態度を生み、最終的に高い学力に結びつくものと考えられる。しかも、子どもの学習に与える保護者の影響は、小･中学生ではとくに大きく、この時期に保護者がどうかかわるかによって、学力差が生まれる可能性が高い。

したがって、子どもの学力を高めるためには、学習内容や方法を子どもに教えるといった直接的な支援だけはもちろんであるが、子どもの学習に積極的にかかわるように保護者を援助することも必要であると考える。このことは、保護者が直接に勉強を教えるということだけではない。むしろ、家庭で学習しやすい環境を整える、子どもの関心や意欲を高めるような働きかけをするといったことが大切だと思われる。

どのような働きかけが、子どもの学習への関心・意欲を高め、自分で学ぶことのできる態度や姿勢を育てることができるのか。また、子どもの進路決定にどうかかわり、援助すればいいのか。学校や地域の教育力が、以前と比べて弱まっている今日、そうした情報を、保護者に提供する必要性が高まっているといえる。

● 学習基本調査」について

このたび分析結果をご報告いたします「学習基本調査」は、児童･生徒の学習に関する意識･実態をとらえることを調査テーマとしています。第１回（1990年）、第２回（1996年）、そして今回（2001年）と、ほぼ同じ質問項目で、同一の学校にご協力いただきました。そのため、子どもたちの時系列的な変化を正確に把握することができます。また、各回とも全国の小･中･高校生を対象としており、学校段階による違いをみることができるのも大きな特徴です。

また、今回の調査では、対象となった児童･生徒の一部に「学習到達度に関する調査」（国語と算数・数学）を実施しており、学力の形成に影響をおよぼす要因についての分析も行っています。このレポートも、保護者の子どもへのかかわりが学習意識・行動にどのような影響を与え、学力の形成にどう作用するのかを明らかにすることを目的としています。

●調査概要

①学習に関する意識・実態調査（アンケート調査）

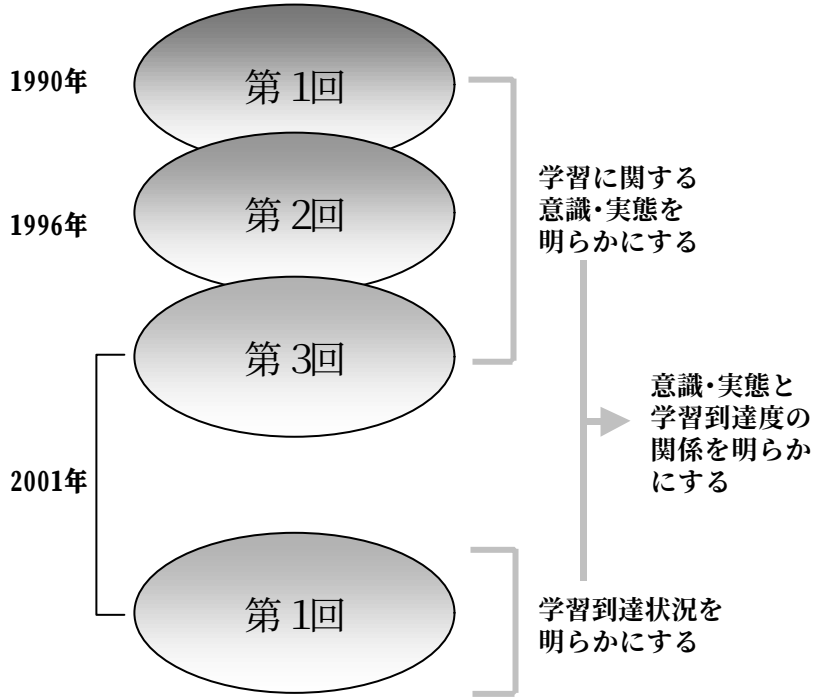
●調査テーマ
学習に関する意識・実態調査
●調査方法
学校通しの質問紙による自記式調査
●調査時期
2001年５～６月
●調査対象
小学５年生：2,402名
中学２年生：2,503名
高校２年生：3,808名
※全国３地域（東京都、香川県、福島県から抽出、高校のみ鹿児島県が入り４地域）

②学習到達度に関する調査（到達度テスト）

●調査テーマ
学習到達度に関する実態調査
●調査方法
学校通しの調査票による自記式調査（テスト）
●調査時期
2001年６～７月
●調査内容
小学５年生、中学２年生：国語、算数・数学
高校２年生：国語、数学、英語
●調査対象
小学５年生：アンケート調査協力者のうち1,357名
中学２年生：アンケート調査協力者のうち1,021名
高校２年生：アンケート調査協力者のうち3,106名

●調査の枠組み

①学習に関する意識・実態調査（アンケート調査）



②学習到達度に関する調査（到達度テスト）

※小･中学生は、前学習指導要領に示されている前学年までの目標が達成されているかを確認する内容で、国語と算数･数学の問題を開発した。
※高校生は、「進研模試」（国語、数学。英語、２年生７月実施）の結果を使用した。